

イザヤ書 41 章 17-20 節

使徒言行録 17 章 22-31 節

ヨハネによる福音書 15 章 1-8 節

庭のバラがきれいに咲いています。今は赤いバラが中心ですが、これからどの色のバラが咲くか楽しみです。梅の実も順調に育っています。

さて、本日も福音書は「ヨハネによる福音書」です。この福音書は、同じような言い回しや主題が、何度も繰り返されることが特徴ですが、その一つに「わたしは～である」というイエス様の表現があります。先週の「わたしは道であり、真理であり、命である」に続き、本日の箇所では、「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」とあります。本日のイエス様は、ご自分を「ぶどうの木」にたとえて説明しているのです。

ぶどうは、イスラエルを含めて、地中海世界において一般的な果物です。そして、『聖書（旧約）』を見ますと、ぶどうの木は、イスラエルを示す「しるし」として用いられています。本日の旧約日課にぶどうの木は登場しませんが、詩篇 80 篇 9 節、ホセア書 10 章 1 節、ゼカリア書 8 章 12 節などで、ぶどうの木と実とは、主なる神様が与えた平和と豊かさの「しるし」として描かれています。つまり、主なる神様とイスラエルとの関係は、ぶどうの木とそれを育てる農夫との関係にたとえられているのです。

しかし、ぶどうの木に対する批判的な記述もあります。それは、イスラエルが自己満足に陥り、主なる神から離れ、自分たちの力で自分たちは実を結んだと、思いあがってしまう歴史があったからです。

イエス様は、このような前提の中で、「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」と語ります。旧約において、農夫は主なる神様であり、育てられるぶどうの木がイスラエルでした。しかし、イエス様は、自分がまことのぶどうの木だと語っているのがこの特徴です。

なぜ、イエス様は、父なる神様とひとつでありながら、自分をぶどうの木であると語ったのでしょうか。それは、先ほど見たイスラエルの歴史にある通り、イスラエルが、自分が育てられるぶどうの木であることを、忘れてしまうことがあるからです。もちろん、イスラエルの歴史においては、モーセをはじめとして、祭司、預言者があり、律法を代表とする『聖書（旧約）』があり、主なる神様とイスラエルとのつながりを正しくしようとしていました。しかし、主なる神様は、それらよりもっとわかりやすい形で、そのつながりを成立させてくださる方を遣わされたのです。それがイエス様です。つまり、ぶどうの木は、主なる神様の愛そのものを象徴しているのです。そして、その愛はすべての人に開かれていますので、ぶどうの木であるイエス様につながる人は、もうイスラエルに限らないのです。

イエス様を信じる時、イスラエルに限らず、誰でも主なる神様につながる、それゆえに、次にイエス様は、「わたしにつながっていながら、実を結ばない枝

はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる」と語ります（15：2）。前半部分の表現は少し厳しい内容となっていますが、主張の主題は後半部分です。わたしたちは、主なる神様とイエス様との関係の中で、イエス様につながる枝です。そしてイエス様につながってれば、実を結ぶのです。なぜ、イエスにつながっているとなぜ実を結ぶのか、それは、「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている」からです（15：3）。

イエス様の言葉によって既に清くされている、この清めるという言葉は、ヨハネ福音書では、洗足の場面「イエスは言われた。『既に体を洗った者は、全身清いだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。』」（13：10）という部分で用いられています。ここでは洗う以上の意味、すなわち、物質的な意味だけではなく、精神的な意味でも用いられています。ただし、「清い」とは、もうわたしたちには罪が全くなつたという意味ではありません。救いへの準備が十分であることを示しています。そのことは次のイエス様の言葉、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながってれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」（15：5）からわかります。

わたしたちはぶどうの木の枝です。そして枝も木と同じように、農夫である主なる神様がおられなければ、枝として存在できないのです。そして、主なる神様とともにおられた、「ことば」であると同時に、肉なる人となられたイエス様がおられるからこそ、この関係が実現しました。それだけイエス様は、わたしたち人間と神様を、しっかり結び付けてくださる方に他ならないということです。この結びつきがあるからこそ、わたしたちは清いのです。そして、実を結ぶことができるのです。

イエス様は、15章8節で、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい」と語ります。少し先の17節でも「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」と語ります。父なる神様は、農夫としてぶどうの木であるイエス様をしっかりと愛された。そしてイエス様も、木としてわたしたち一人ひとりを、枝としてしっかりと愛された。だから、愛が流れているその関係に留まっていなさいと、ここでは命じているのです。信じることの次に大切な事柄は、愛に基づいた交わりに他ならないのです。

交わりの形はいろいろとあります。今年の聖霊降臨後は、礼拝の後に今までよりも、もう少し豊かな交わりを持ちたいと思っています。また、昨日は22年前に逝去された方の納骨式と逝去記念の式があり、わたしたちの交わりが、天ともつながっていることを確認しました。そして、それらの交わりの第一歩といえるのが、祈りです。今年も、「み国が来ますように」というプロジェクトがあり、誰かのために祈ることへと呼びかけられています。誰かのために祈ることから交わりが始まります。この世界に主なる神様の愛が満ちるために、ご一緒に祈りたいと思います。